

街路樹

学力向上に向けて 37

忙しい時こそペア研修 — 本時の目標を巡って —

同僚の生活科の授業を参観する機会があった。生活科の本質といった視点に思いが及ばない。困って、同僚とペア研修を行った。話し合いの視点は、指導案にある本時の目標「グループで工夫してお店をつくることができる」に絞った。

忙しさを言い訳に、事前の準備は一つだけ。算数で実践していた4つの具備条件を基に本時の目標を分析した。

- ・何を <対象、学習内容> → お店
- ・何で <方法、手段、学習活動> → グループで
- ・どの程度 <水準を示して> → 工夫して
- ・何ができる<行動で、目指す姿> → つくることができる

授業を参観して、放課後、再び同僚と短時間で話し合った。

「グループ活動でなく、一人一人が身近なものを使う活動の選択肢もあった。自分のことは自分でできる子どもを育てるために、事前に学習活動を吟味すべきでないか」

「授業は、お店で遊ぶものをつくる活動が中心であった。だから、目標は、身近なものを工夫してお店で遊ぶものをつくることできるとすべきだ」。さらに、こんな意見も出た。

「教材研究の時間をつくるのが難しい。ならば、日々の授業の吟味は、週案を書く段階でやるのが良いのでないか」

ペア研修は、私にとって有意義な体験となった。日々の授業においても学習内容や学習活動は、よりよいものを選択すべきであることを実感した。そして、生徒指導上の記録簿として位置づけていた週案の役割を考え直すきっかけともなった。

ペア研修は、忙しい学校においてこそ有効であると感じている。

<参考>目標の書き方について

指導資料等にも統一された型は示されていない。次に示すような事について校内で共通理解を図った方がよいだろう。

- 1 指導目標(教師の指導の方向を表したものの。文末が～させる)にするか目標行動(指導成果として学習者に形成して欲しい到達目標。文末が～することができる)にするか。
- 2 本時の目標に観点別の目標を書くか。(評価規準が導入され、重点化した観点別の目標を書く場合がある)
- 3 目標分析の手法で下位行動目標を書くか。(これが形成的評価として指導案の評価項目となる)

今月のひとこと ②

～ 子どもの理科離れは先生の責任 ～

理科を好きになるか嫌いになるかというのは、小学校5、6年から中学1年ぐらいの年頃で決まります。それはほとんど教える先生の責任です。理科を教える先生自身が理科をおもしろいとおもっていなかったら、その先生に教わる子どもが理科を好きになるはずはありません。理科に限らず、どの教科でもどんな先生に教わるかが第一です。

私が先生なら、まずは子どもたちと一緒に遊びます。遊びながら、子どもたちを観察し、それぞれがどんなことに興味をもっているのかを考えます。そのうえで、子どもたちの興味や関心が向かっていくような、さまざまな実験を一緒に行っていけば、絶対に理科が好きになるはずですよ。

私は、人を教えるときにいちばん大切なことは、一人ひとりの人間に、「やりたいことの種」を植えることだと思います。

ノーベル物理学賞受賞者 小柴昌俊氏 総合教育技術2010.7より

授業改善・指導技術 27

～ 発問について振り返ってみよう ～

発問は、授業展開の中核となるものです。授業改善のために「発問」について振り返ってみましょう。きっと、授業がかわります。

□ 発問をしているうちに内容が変わっていないか。発問が理解できるか。

同じことを子どもに言っているつもりでも、言葉が変わると子どもは、違う発問と受け取ります。言葉が変われば発問が変わったと思うのは当然ですが、このことに気付いていない先生が多くいます。例えば、最初の発問で「この問題文を見て、何か思うことを発表してください」といいます。挙手が少ないと「何でもいから気が付いたことやわかったことを教えてください」といいます。すると、新しく挙手は増えますが、今まで挙手していた子どもの何人かは、手をおろしてしまいます。すると今度は「何でもいから発表してください」になります。先生はイライラして誰かを指名します。その子どもは「 $12 \div 4 = 3$ です」というと、「そんな式なんかまだ聞いていないの」と言われたら、子どもは間違っと思って次には挙手しないかも知れません。

きちんと先生の話聞いていても挙手が少ない場合は、発問のどこかに難しさがあるわけですから、そこをやさしくするなどの指導上の配慮が必要です。

授業は発問で進みます。子どもは発問で考えます。よい発問で学び方を学びます。

- 発問や助言が一問一答、yesかnoかではないか
- 発問後、考える間もなく、すぐに指名していないか
- 挙手が2～3名でも話し合い活動や作業を進めていないか
- 「他にないか」等予定した反応が出るまで繰り返していないか
- 理解が遅れがちな子どもへの配慮がなされているか

—「学校担任だより」長嶋 清著 東洋館出版社より—

◆「よい授業」のすすめP24,25でもチェックを◆

学級経営のヒント 25

◇ 保護者とのよりよい協力のために ◇

～指導上の問題が起きたときの連絡・面談の基本的姿勢～

1 肯定的関心を払い続ける

- 保護者を問題に感じることや関係が取りがたい場合でも、肯定的関心を払い続けることを一番に心がけたい。例えば、「このお母さんなりに一生懸命なんだなあ」「強がって強く見せているのかなあ」と、自分に余裕を持たせ保護者を理解しようとする。

2 保護者の苦勞をねぎらうこと

- 保護者と面談し事情が分かってくると、子どもの問題が保護者の問題(養育、家庭、夫婦など)と関連していることが多々あるが、苦勞をねぎらうことから始め、子どもの問題に取り組む勇氣・元氣を与えるようにし、保護者の理解者(支え)となる。

3 子どもの問題の解決だけを指すこと

- 話題が夫婦・嫁姑関係などに及んでも、事情を踏まえた上で、保護者という立場で子どもに何が出来るか、子どもとの関係をどうしていくかに意識を集中させて励ましたり助言したりする。

4 上手に聴くために座る位置を考える

- 机をはさんで90度の角度の配置にすると、面と向かって向かい合わないで、話す方も聴く方も話しやすくなる。

5 上手に聴くこと

- 具体的には、「受容する」「共感する」ようにする。その第一に「繰り返し」がある。これは話を聞く上で大きな意義がある。

6 お土産を与えること

- 保護者に来てよかったという気持ちを持って帰ってもらうことで、やれているところを強調してお土産として与える。

「保護者との関係に困った教師のために」ぎょうせい より